

翌朝一番に着信メールを調べる。浩史から正月は帰らないという返信が入っていた。ここ十日あまりは北海道へ撮影の仕事で出張していたので返事が遅くなったとのことだ。

会社に勤めていた頃、カメラマンの友人をみて、撮影現場にあわせて動くので家にはまともに帰れないようだと同情していたけれど、今となっては自分がそれもやっているらしい。新しい得意先の開拓に苦労しているにちがいない。名指しで仕事はどんどん入るようになるのはずっと先のことだろう。加代はあれこれと案じながら出かける用意をした。

八時少し前に部屋を出て駅に向かった。前にある事務所はまだ閉まっている。昨日は休んでいたけど今日は営業するだろう。加代は帰り道の路面の明るさを思い浮かべながら足早に通り返した。

ここ数日、風邪が流行っていて欠席する子が何人もいた。外は寒かったので子供たちは一日中、室内で過ごし騒がしかった。

ようやく八時間が終わったが、預かった子供が少なかったぶん母親たちも会社を休んでいたから、発送部門では遅れが生じ、幾人かの女子社員が残業を命じられた。加代はその子供たちの延長保育を受け持つ羽目になる。佐知子たち同僚は皆、家庭があるのを当然の言い訳にしてさっさと帰ってしまった。

加代は七時半過ぎに最後の幼児を親に引き渡し仕事が終わった。

帰りの電車はラッシュを過ぎていたのでさほど混んでいない。そのせいか荷物棚より上のあたりに貼られている広告がよく目立つ。忘年会、新年会用の料亭の宣伝やツアー旅行の募集など、どれも加代には用のないものばかりだった。加代はドアの

すぐ横手の壁に細い身体をもたせかけ軽く目を閉じた。

宮の森駅が近づくのと加代はふと思った。この時間ならあの事務所はまだ明かりが点いているだろう。奥まった席で年配の税理士がパソコンに向かっている光景が瞼の奥を過ぎる。

加代は短大を卒業してから結婚までの三年間を建設会社の経理課に勤務していたから事務の経験はあった。その頃は勤めをしながら、父の店の伝票整理や帳簿付けを手伝っていた。

その最終まとめは五十過ぎの高槻税理士に頼んであった。彼は温和な人柄だが収支をみるときは妥協を許さない人だった。毎月帳簿を仕上げに来てもらった。彼は記帳された数字を見て経営改善のアドバイスをしてくれたが、当の父は聞き流しているらしく、帰ったあとでは呑気なことを言う。

「先生は税金が安くなるように帳面を合わすのが仕事だろうが…」
やがて営業成績は悪化した。家電製品は年々種類が増え、性能も良くなり開店当時に較べれば故障は格段に減っている。修理の技術より販売の手腕が求められる時代がきたといえるのだ。技術屋気質の政一は時流に乗り切れなかったのだろうか。電気と木工の他にいつのまにか鉄工の技も身につけて、本業以外の仕事にも手を染め始めた。農業用の機械施設や電動車いすなど特別注文に応じて制作して幾ばくかの収入を得ていた。

そのかたわらハミリ映画に凝った。ハミリ映像は当時、無声だったのでトーキー化する研究に長らく没頭していた。足かけ六年を費やした後、特許も申請してハミリ映画をトーキーにする器械が仕上がった。フィルムメーカーと提携して発売し、販売

はすべてそちらに任せた。政一は店とは別に小さな工場を興して器械の製造をするようになった。

電機店のほうは、母と若い店員が細々ながら続けていた。店の営業のうえに製造部門が加わり経理は複雑になった。高槻税理士には日曜日に来てもらった。

「平日はご自分のお勤めがあるし、なかなか大変ですね」

彼は加代に労いの言葉をかけてくれたが、政一は、

「そりゃあ、当然じやろうが……。うちの跡取り娘や……」

ははあっと笑い飛ばし、もう一言つけ足す。

「すぐに工場を手伝わせてやってもいいようなもんだが、修行のためにいったんは、社会に出さんことには一人前にはならんからなあ」

政一は器械の製造に意欲をもやし、店の客までに自分の才能を吹聴するようになる。

「これからは自分の発明を商品化して儲ける。他人に真似できないものをつくる。

これが一番いい……」

家電メーカーの販売策に振り回され、少ない利益に甘んじるのは能無しのとだど暗に言いたいらしかった。母は快活に笑う夫に寄り添って目を細めた。

設備投資は銀行からの借入金で賄った。融資を受けるさいは自宅を担保に入れてもなお連帯保証人が必要だったので、父の唯一の兄弟、章二叔父と父の従兄弟たちに頼んで引き受けてもらった。だがトーキーの器械は三年めには在庫品を抱えたまま製造中止になった。

次の商品開発が間に合わず、その年は赤字を出した。そうなると借金のほうは返済どころか額が増えた。保証人たちからは、他の人に肩代わりしてくれと何度も催促が

くる。

「借金が増えたというけれど、考えてもみる。銀行が貸してくれるのは先々会社が伸びると思うからや。それだけ俺に信用があるからだろうが。信用は財産じゃ」

政一の言い分に加代は首を傾げた。銀行としては倒産しても保証人さえしつかりしておれば貸し金は回収できるとふんでいるのだ。それに貸付を増やせば利息収入もあがる。

口伝えに聞いたのか、政一のところへはその発想と技術を利用して一儲けを企む連中がひっきりなしにやって来た。政一はどんな難しい注文にも、自分が本気でかかったら大丈夫と胸をたたいて引き受けた。しかしすべて巧くいくとは限らない。

仕上がった器械が使い物にならなくて儲かるどころか元の出資が取り戻せず苦情があがるものもあった。

どんないい話がきても全部断わり利益が少なくても損する心配のない電機店の仕事をして欲しいと、常々、加代は思っていたのだが、新しい話が持ち込まれると、

また目を輝かせて取り掛かってしまう。政一は町の発明家と言われる一方で大風呂敷と囁かれた。

加代の勤め先の建設会社は世の高度成長の波に乗って着実に営業成績を伸ばしている。それにひきかえ、政一の仕事ぶりは採算を度外視した道楽としか言いようのないものだとか代は思っていた。

その頃加代は同じ会社の建材課に勤める憲志と知り合い交際を始め、一年後に二人は結婚を決めた。それを知って高槻税理士は困惑顔で加代に言った。

「結婚すれば、こつちへはもう来なくなるでしょう。お嬢さんが経理を手伝わなくなる……社長と奥さんだけでは、ちよつと……」

「大丈夫です、先生。妹の弘子が代わって手伝います。いろいろ教えてやってください。お願い致します」

加代は深々と頭を下げた。高槻は軽く数回頷いた。加代の婿には家業を継いでくれる男をと決めていた父は憲志との結婚に大反対だ。憲志は将来、今の会社を辞めて工務店を開くのが夢だから、政一の仕事に携わる気は毛頭ない。母は夫と娘の仲にたってどうしていいか分からず、沈み込んで愚痴をこぼしていた。

表向きは親の反対を押し切ったの恋愛結婚にみえただろうが、加代の思いは別のところにあった。貧しくてもいいから安定した家庭を持ちたい。そのためには家を出るしかない。父の思惑に振り回されるのはもう御免だ。加代は目を伏せたまま黙っていたが、高槻の穏やかな眼差しが老眼鏡の奥から自分に注がれていたのを今も忘れていない。

電車は宮の森に着いた。下車したのは加代ひとりだ。足が浮腫んでいるのでブーツの爪先がじんじんする。痛みを我慢してホームに降り、顔をあげ踏み切りの方を見渡し、加代は乾いた唇から小さなため息をもらした。

事務所のガラス戸は暗く閉まったままのようだ。年末調整などで忙しい時期なのに、二日も続けて休むなんて…事務員もいないのが気になる…。

加代は暗い足元を気遣いながら事務所を通り過ぎたところでいつものように立ち止まりコートの襟を立てる。自分の棲みかを見あげ一息つく。建物は駐車場の奥で闇を四角に区切っている。

近づくと窪みが左右対称な位置に二箇所ある。奥に暗い裸電球の灯っている階段だ。その一方の入り口で佇み、加代は建物の西に広がる田んぼのほうに目をやった。

あちこちに明かりの灯った住宅が点在し、細い月が低い空に頼りなげに傾いている。昼間ならその先に諏訪神社の高い木立が望めるのだが…と目を凝らしてみる。月が社の森に架かったら、そのありかが確かめられるだろうか。ここしばらく寒かったので、お参りしていない。年内に一度は行こうと加代は思った。

次の晩も加代は踏み切りまで戻り着いたところで事務所のようにすを確かめたが、やはり閉まっていた。二、三日経つと、とうとうガラスドアに、夜目にも黒々と『貸物件』と書かれた紙が貼り出されていた。どこへ引っ越したのだろう。帰り道に長年、店先の明かりに馴染んでいたのに当の税理士には会釈の一つもせずじまいだった。

部屋の鍵を開け、入ると留守番電話の緑のランプが点滅していた。弾んだ指先で再生ボタンを押すと章二叔父の嫁、正枝の声が流れ出てきた。加代は肩を落とした。正枝は加代が元気にしているか気になって掛けてみたと言い、だらだらと自分の近況も喋っている。そのうちに録音時間が終了して切れた。

叔父の家は実家の隣町にあり、兼業農家で息子夫婦と同居している。三年前、夫の三回忌の法事を寺でおこなったとき叔父夫婦は来てくれた。その後は年賀状だけの付き合いだ。

(以上11月28日放送分)